

遣わされる者として

ローマ 10:14-15

1) 素晴らしい福音は人によって伝えられる。

ローマ 10:13 に「主の御名を呼び求める者はみな救われる。」とあるように、どんな苦しみ、どんな問題の中にある人であっても、主の御名を呼び求める者、つまり、イエスは救い主キリストであると心に信じ、「イエス・キリストは主です。」と口で告白し、悔い改め、へりくだって祈る者は、だれでも救われます。主イエスはすべての人のために救いを用意して下さっているのです。さらに主イエスは「あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしがそれをしてあげます。」ヨハネ 14:14 と約束してくださっています。どんなことでも、キリストのお名前によって祈ることができるのです。何をどう祈ってよいかわからない時でも、「主よ、主よ。」と主の名前を呼び続けるなら、その祈りは主のもとに届くのです。

例外なくすべての人に救いは用意されています。しかし誰かがまだ主イエスを知らない人たちにキリストを伝えなかったら、その人たちはキリストを信じて、祈ることは出来ません。祈っても効かれるかどうか分かりません。聞かれているかどうか分からない祈りは厳しい言い方ですが自己満足に終わってしまいます。ローマ 10:14 に「しかし、信じたことのない方を、どのようにして呼び求めるのでしょうか。聞いたことのない方を、どのようにして信じるのでしょうか。宣べ伝える人がいなければ、どのようにして聞くのでしょうか。」とあります。これを逆に言えば、キリストを語る人がいなければ、キリストのことを聞くことはなく、キリストのことを聞かなかつたら、キリストを信じることもないということです。「ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」ローマ 10:17 とある通りです。そして、キリストを信じることがなければ、キリストを呼び求めることもなく、キリストを呼び求めることがなければ救いはないのです。こんなに素晴らしい救いがあるのに、それを語ること、伝えること、知らせることがないならば、人は救われないのです。語ること、伝えること、知らせることにはクリスチャンそれぞれ様々な方法があるでしょう。しかし、根本的に伝えなければ、知らせなければ、主を知らない人がキリストを信じるということは起きないのです。

2) キリストを伝えるということ

ここで一つ注目しておきたいことがあります。17 節の「信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」の中の「キリストについてのことば」ということです。これは聖書の註にもあるように「キリストのことば」とも訳せることばです。つまり「宣べ伝える人」が語るのは、イエス・キリストについての言葉ではなくて、イエス・キリストの言葉、イエス・キリストからの語りかけであるということです。パウロがここで見つめているのは、イエス・キリストについての知識や情報がどのように得られるかということではなくて、主イエス・キリストご自身との出会いと交わりがどのようにして起るかということです。キリストを伝えるということは、数学や歴史を教えることとは違います。伝道は、たんに客観的な真理を伝達することでは終わりません。自分の救いの体験を通して、キリストを語ることです。テレビで観たものや本で読んだことを人に教えるのと、自分が直接見たこと、聞いたこと、体験したことを語るのには、大きな違いがあります。自分が体験したことは、情熱を持って語ることができ、その情熱によって、真理が相手に伝わります。自分自身がキリストの救いについてあやふやでは、力をもってキリストを伝えることはできません。イエス・キリストが「宣べ伝える者」を遣わして下さり、その人を通してご自分の言葉を語りかけて下さり、キリストご自身の言葉を聞くことが起り、それによってキリストを信じる信仰が与えられ、そしてキリストのみ名を呼び求めること、つまりキリストと共に生きることが起っていくのです。礼拝において起っているのはまさにこういうことです。私が礼拝で語っているのは、イエス・キリストについての講演ではありません。勿論聖書の言葉を正しく受け止め、理解するために必要な説明をしているつもりです。しかし説教は根本的には、神ご自身

の、主イエス・キリストご自身のみ言葉なのであって、語っている私も、聞いている皆さんも、共に神からの語りかけを聞いており、神のみ前に立って礼拝をしているのです。ですから礼拝と講演会は違います。講演や解説を聞いてイエス・キリストについての知識をいくら学んでも、それで主イエスの名を呼び求める信仰が生まれるわけではありません。礼拝において、主イエス・キリストご自身からの語りかけを受け、主イエスとの出会いと交わりを与えられることによって、私たちは主イエスを信じ、その救いにあずかる者となるのです。伝道しなければならない、伝道したいと願っていても、いったい、何をどう話せばいいのかわからない人もいることでしょう。また、話すべきことが分かっている、こんなことを話しても拒否されるのではないかという恐れが起こって来ることもあるでしょう。そうしたことを乗り越えるためには、語るもの、すなわちクリスチャン一人一人が整えられている必要があります。聖書は「遣わされることがなければ、どのようにして宣べ伝えるのでしょうか。」ローマ 10:15 と言っていますが、「遣わされる」という言葉は「送る」ということとは違います。遣わされるという言葉は大使館の大使が遣わされるということばが使われています。つまり伝道とは私が知っているありったけのキリストについての知識を語るのではなく、神が働きかけてキリストを信じるに至ったこの私という弱い器を通して、権威あるキリストのことばが伝わってゆくということです。

また、キリストの救いを確信していたとしても、私たちの中に、神に喜ばれない罪があったり、利己的な思いがあったり、人を恐れる思いがあるなら、それもまた、私たちがキリストを伝えるのを妨げます。それを防ぐにはそうしたものからきよめられる、きよめの体験、罪の赦しの体験が必要です。人に伝える前に自らのキリスト信仰の確認が必要です。私たちが語る福音の中心は、キリストが私たちの罪のために死んでくださったこと、私たちの救いのために復活してくださったことにあります。つまり、罪からの救い、罪の赦しが福音の主題です。罪を認め、それを悔い改める体験なしには、罪からの救い主イエス・キリストを語り、罪の赦しの福音を語ることはできません。伝道するのに、聖書の知識が多くあればそれにこしたことはありませんが、どんなに、多くの知識を持っていても、こうした罪の赦しの体験がなければ、他の人をキリストに導くことは難しいことだと思います。このことはそう難しく考える必要はありません。クリスチャンは誰であっても人生のどこかでみことばを通してキリストと出会い、罪を示され、悔い改め、主の十字架によって罪赦される体験をしているからです。

3) 伝道すること

最後に 15 節の「なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は。」ということばに目を留めたいと思います。足の何が美しいのでしょうか？この足は、ある知らせを伝える伝令の足です。昔は今のようには電話も無線も、まして携帯などありませんから、何かの知らせ、出来事を伝えるためには、人間がその知らせを携えて走るしかありませんでした。そこですぐに思い出すのは、マラソンの語源となった、紀元前 490 年のペルシャ戦争における「マラトンの戦い」の話です。ペルシャの大軍が攻めて来ており、この戦いに負けたらアテネの市民たちは皆殺しにされるか奴隷に売られてしまう、という状況の中で、ある兵士が完全武装のままマラトンからアテネまでの 42.195 キロを走り、「我ら勝てり」と告げて絶命したという話が「英雄伝」という軍記物語にあります。「我ら勝てり」という知らせはアテネの人々にとってまさに救いの知らせ、良い知らせ、つまり福音でした。福音を告げたこの兵士の足は、泥まみれ、ほこりまみれで、またまさに息も絶え絶えの疲れ切った足、傷だらけの足だったでしょう。しかし彼のもたらした知らせのゆえにその足はアテネの人々にとってこの上なく美しいものとなったのです。つまりこの足の美しさは、その人が携え、伝える知らせによることです。「良い知らせ」を伝える者の足は、泥まみれであっても、傷だらけであっても美しいのです。それは私たちの人生の歩みにおいてもそうです。福音宣教のポイントは救い主なる主イエス、そして語られたおことばを伝えることにあります。現代、情報は、テレビやラジオ、インターネットや新聞などによって伝えられ、福音もまた、こうしたメディアを通

して、伝えられています。便利な時代になりました。神は、こうしたメディアを用いてくださいます。しかし、神が、人を信仰に導かれる時には、人を用いられます。特別な場合は別として、メディアは伝道のきっかけとしては用いられても、それは、人を悔い改めや信仰に導くことはありません。ある人が「伝道とは人格から人格へとイエス・キリストというご人格を伝えることである。」と言いましたが、おひとりの人格を他の人格に伝えるには、どうしても「人」が必要なのです。「この本を読んでおいてください」ではすまないのです。

しかし、神が、伝道のために私たちを必要としておられるというのは、よく考えてみると恐ろしいことです。救いは、神の主権と愛によって備えられたもので、そこには人間の知恵や努力が入り込む余地は少しもありません。それなのに、神様は、救いの計画のなかに、私たちの伝道を組み入れてくださっているのです。もし、私たちが伝道するとその弱さと罪深さゆえに、神の計画も、キリストの十字架の苦しきも無意味なものになるかもしれません。それこそイエス様の顔に泥を塗るようなことになりかねません。しかし、神様は、私たちを信頼し、伝道を私たちに任せてくださいました。御使いは完全な存在ですから、神は御使いに福音を伝えることを任せてもよかったのかもしれませんが。しかし、神は、不完全な人間にそれを任せました。なぜでしょうか。それは御使いには罪がなく、罪の赦しの喜びを知らないからです。人間は不完全で罪を持っていますが、そのかわり、罪赦された喜びを知っています。ですから、人間は、罪の赦しを伝えることができるのです。神様は、罪に苦しんでいる人間への伝道を、罪の赦しを知っている人間に、お任せになったのです。御使い（天使）が世界を歩き巡れば、たちまちにして福音は伝えられるかもしれません。しかし、神は、御使いのように羽を持たない、足で歩き回ることしかできない私たちに福音を委ねられました。聖書では、「足で歩く」というのは、「地上の生活をする」あるいは「信仰の生活をする」という意味で使われています。神は、この地上の生活の中で、苦しみ、うめき、救いを求めている人々に、同じ現実の中で生きている私たちを遣わされるのです。イエス・キリストご自身も、御使いとしてではなく、人間としてこの世に来られ、この地上を歩き回り、伝道されました。ですから私たちも、伝道の使命が与えられていることを頭で理解するだけに終わらず、きよめられた心をもってその使命にこたえ、自分の足を使い、実際の行動を通して、伝道に励みたいと思います。未信者の方はクリスチャンの立派さを見たいわけではありません。同じ人間として様々な苦しみに会う時その困難をどのようにイエス・キリストを信じ、信仰を持って進み、解決しようとしているのか、またどのように神様は応えてくださるのかそれを見たいのです。祈ります。